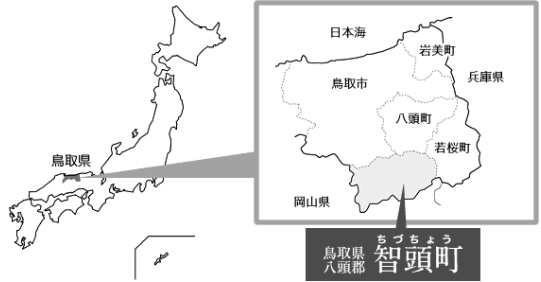


# 集落を主体としたまちづくり 鳥取県・智頭町の取り組み

## ◎智頭町について

智頭町（ちづちよう）は、鳥取県の東南に位置する人口約9千人弱の小さな町です。町の西と東は岡山県に接していて、町の面積の約93%が山林です。そのほとんどが杉で、別名「杉のまち」とも呼ばれ、見渡すかぎりの緑が広がっています。また、鳥取砂丘の砂を育んだ千代川の源流の町でもあります。

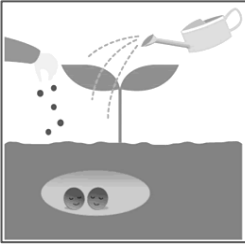


## ◎日本1/10村おこし運動（通称ゼロイチ）

智頭町の各集落でも、他の地域と同様に、戦後の高度成長の過程での人口流出によって過疎化が進み、共同体としての性格を徐々に失っていました。また、集落に残る有力者の保守的・閉鎖的な体質が、多くの若者に村を捨てさせるといった悪影響も及ぼしていました。

智頭町が平成9年度に制度化した「日本1/10村おこし運動」は、閉鎖的・保守的・依存的な旧態依然とした村社会の革新を図り、また、町の活性化は集落の活性化から

小さく生んで大きく育てる  
(1) 村にある種をみつけよう！  
(種がなければ新たな種をまきましよう！)  
(2) 土づくりや水やりをしよう！  
(誰でも参加できる霧田気を作ろう！)  
(3) 芽が出たら大きく育てよう！  
(皆で協力して活動しよう！)



という視点にたつて、「これからその集落に住もう、どうせ住むなら豊かで楽しい村がいい」を理念とするものです。そして、こんな素朴な願いを実現するため、「自分には何ができるか、何に汗が流せるか」、「住民一人ひとりが無（ゼロ）から有（イチ）への一歩を踏み出そう」という運動です。つまり、智頭町内の各集落または各地区がそれぞれの特色を一つだけ掘り起こし、外の社会に開くことによつて、村の誇り（宝）づくりを推進する住民の自立と共有のしくみです。



- (1) 外の社会と積極的に交流を行うため、情報化への取り組みを推進します。(交流・情報)
- (2) 住民自らが一歩を踏み出す村づくりを基本理念とします。(住民自治)
- (3) 村の生活や文化の再評価を行い、付加価値をつくります。(地域経営)

具体的な取り組み手順は、まず、集落または地区の10年後の将来像（計画）を描き、新たな組織（集落・地区振興協議会）の設立と同時に規約を制定します。

### 《規約》

- (1) 原則として全戸が年5千円以上を負担して全住民で運営していくこと。
- (2) 活動の柱を ①交流・情報 ②住民自治 ③地域経営とすること。
- (3) 自らの責任によりボランティアで活動することを主な内容とする（2）こと。

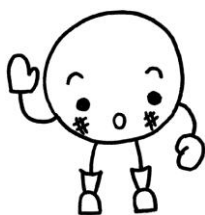
そして、このような条件を満たした集落には最初の2年間は年50万円、3年目から10年目までは年25万円を、地区には最初の2年間に100万円、3年目から10年目は年50万円を町が支援しま

す。また、専門のアドバイザーや町職員（集落助っ人隊）を必要に応じて派遣したり、各集落振興協議会との交流会の開催などの支援もあります。

この運動にはこれまで、町内89集落のうち16集落が参加、5地区のうち2地区が参加しており、年度末に開催される活動発表会では、各集落の独自の活動とその成果が発表されます。

具体的な活動例としては、自慢の田舎料理、集落大運動会、休耕田開放による野菜作り、かずら細工、花見会、遊歩道整備、ホタル復活事業など、集落ごとに特色のあるユニークな取り組みがされています。

このような取り組みが認められて、智頭町は、平成10年度「潤い」と活力のあるまちづくり（住民参加部門）「優良地方公共団体自治大臣表彰を受賞しました。



## ◎新田集落のチャレンジ

「日本1/10村おこし運動」に参加した集落のひとつ、新田（しんでん）集落の取り組みを紹介します。

新田集落の人口は現在わずか18戸、約50人です。高齢化率も60%を超えており、いわゆる「限界集落」のひとつです。何年も前から「このままでは集落が消滅してしまふ」と住民たちは集落の将来に危機感を抱くようになっていました。

そんな折、大阪いずみ市民生協が組合員向けの保養地を探しており、「芋ほりや田植えなどの農業体験をしたい」という相談が町役場にあり、新田集落が選ばれました。平成3年に大阪から親子を乗せた大型バスが初めてやって来て、都市部との交流

が始まりました。一年を通して農業体験ができるプログラムを組み、交流を重ねるうちに、「もう一度、かつての村を取り戻し、子どもたちの賑やかな笑い声を聞きたい」という願いが住民の間に浸透し、本格的に村おこしに取り組みむようになりました。

そして、子どもから高齢者まで集落の全員を対象としたアンケート調査を実施し、この結果を基にして集落の「総合計画」を策定しました。第一次総合計画（平成6年）では、「若者が定住する活気ある村」を作るべく、都市との交流を軸とした拠点整備等が位置づけられ、「人形浄瑠璃の館」や「清流の里新田」が整備され、交流拠点や宿泊施設として活用されています。第二次総合計画（平成11年）では、「広い視野を持つことが必要」との考えから、「新田カルチャー講座」の開催を計画に加え、各界の有識者を集落に招き、毎月欠かさず講座を開催しました。

平成9年から智頭町で始まった「日本1/10村おこし運動」に参加。集落全戸の同意のもと、リーダーを民主的に選び、「集落振興協議会」を立ち上げ、10年後の集落の姿を集落全員で描きました。この運動に参加した10年間に町から受けた助成金のほとんどは視察・研修の費用にあてました。全国各地の元気な村づくりをしている地域を見つけては、集落全員で訪れ、現地を見学し、現地の人たちと交流したといえます。「活動の土台ができた」「みんながまとまった」と、その効果を評価しています。

今、新田集落は第四次総合計画として、福祉の充実や雇用の創出に重点をおいて取り組んでいます。

